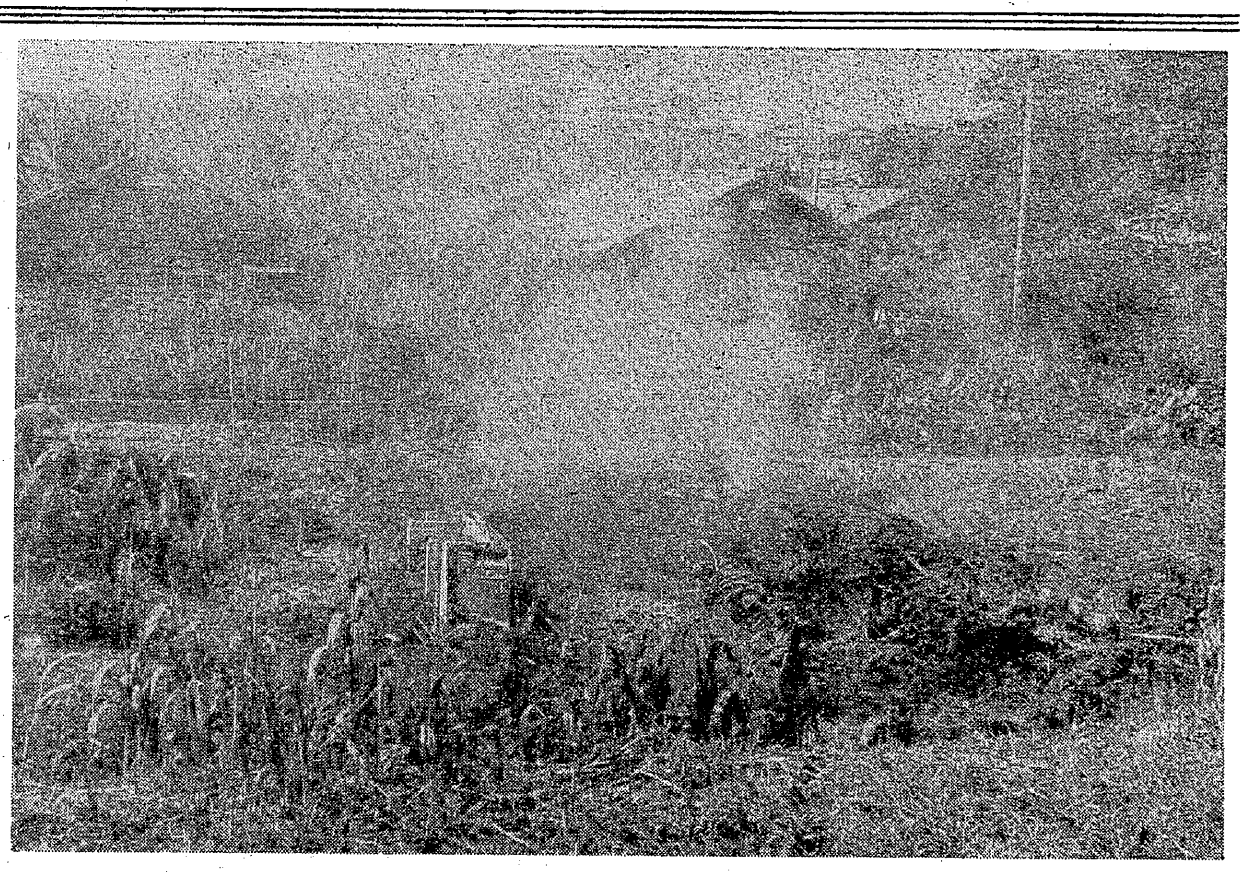

朝、焚火にけむる新勝立町大砂社宅の一隅。足もとからコオロギが飛び立つ。いつの間にか秋が……。

十月の暦

かんなづき

1日　法の日。この日から、労働衛生週間はじまる。
5日　仲秋の明月。旧歴の八月十五日にあたる。
9日　寒露。万国郵便連合記念日。
10日　体育の日。目の愛護デー。
14日　鉄道記念日。
15日　この日から新聞週間。
17日　貯蓄の日。
20日　えびす講。
21日　土用。
22日　京都・平安神宮時代祭り。
27日　この日から読書週間。
31日　世界勤労デー。

×

▼…長期予報によれば、秋晴れの日が多く、北日本での初霜、初雪は早まりそう。

初旬、高気圧が北に偏って通過するため北日本で晴れ、太平洋側では雪が多い。その後秋晴れが多く、北日本や関東北方山岳部には、例年よりやや早く寒気が入りそう。（連合通信による）

なお、炭労の秋季闘争がくる。

おわび

九・二八CO患者家族の猿渡ハギエさんから、随筆が寄せられておりますが、紙面のつごうからやむなく次号に紹介することにしました。悪しからず。――編集部

母親大会その後

港務・臼井分会　酒井　妙子

八月三十二日の母親大会に参加して、先ず私を驚嘆させたのは、若いお母さん達が多かったことでした。それに、これまで言葉こそ交わしたことはないけど、顔見知りの二人のお母さんが参加されていたことでした。

大会後二、三日たって、偶然買い物先で出逢い、「アラ、先日は」から始まり、大会の時見た映画の話までして別れました。

その、お母さんたちが共通して言われることは、なによりも先ず物価安定のことであり、子供を抱えた主婦は、安心して働けるための保育所の充実であり、一般消費税などへの反対、などなどでした。今度こそ私達の代表を、一人でも多く国会へ送り、母達の要求を国の政治で解決してもらわなければならない、ことを誓い合ったのです。

私は、自分が母親大会に参加したことが、本当の意味において有意義だったことを、痛切に感じております。それに、若いお母さんたちとの話し合いの場がひらけたことを、非常によろこんでいます。

今後は、母親同志の連帯を大切にして行きたいと思っています。

×

この〝姿見〟欄は、述べるまでもなく三池主婦会の姿を映す鏡です。三池主婦会の真実の姿を見ようと思えば、〝姿見〟欄を読むことです。みんなでこの欄を守り続けていきましょう。

作文　楽しかった〝おごうりレク〟

三池主婦会が主催しました〝小郡レクレイション〟は、子どもたちによほど楽しい思い出を残したものと見え、また次の作文が寄せられてきました。大変ありがとう。

小学五年　西村　芳子

バスにのって、おごうりハイツにつくまではたいくつだったけど、ついてからみんなでテントをはったり、ドッチボールをしはじめたりすると、少しずつ楽しくなってきたのです。

おべんとうをたべるときは、たくさんの知らない人たちといっしょだったけど、めずらしい、くねくねした、めいろのようなシャワーから出る水で遊んでいると、知らない人ともいっしょになって、キャッキャッ、バタバタ、と遊びました。

高さ十一メートル、長さ三十メートルのスベリ台ですべるのははじめてで、スリルがあっておもしろかったです。私は、えんめいプールや甘木山ハイツなどにいったけど、それ以上におごうりハイツの方がプールも大きいし、いろいろなせつびもたくさんあって、楽しかったです。

「いってよかったなあー」、と思いました。そして、「らい年はお母さんと行こうね」、と約そくしました。

最初は知らない人ばかりだから、どうしようかなあーと思ったけど、おごうりハイツの場所もわかったし、知らなかった子どもたちやおばちゃんたちともなかよしになったので、いってよかったなあー、と思いました。

またらい年も、ぜひどこかにつれていってください。

小学五年　宮崎智恵美

小郡ハイツにいって、とても楽しくおべんとうを食べて、プールにはいって泳いでいると、「おーいきみ、あのおばさんに、プールの中ではふつうのぼうしをかぶって泳いではいけない、といってきてくれないか」、といわれた。私は「はっ」、と思いました。たいがいの人が、ぼうしをかぶっていたからです。

つんとして、また泳ぎだしました。

そしたら西村さんが、「宮崎さんあがって、ひと休みしようよ」といいました。

そのとき、あの、ぼうしのことをいったかんし人のお兄さんが、「お前宮崎か。おれも宮崎ぞ」といわれた。「うそでしょう」、といったら、「ほんとたあ」といわれた。私はびっくりした。小郡にも、宮崎さんという人がいたなんて。今度いったときは、またいろいろな話しをききたいなあ、と思いました。

またきかいがあったら、いきたいです。その日を楽しみにまっています。

短歌　秋のおとずれ

三川指導部　町　佳郎

網戸より夜風入りくるながつきのわが読む書（ふみ）の上（え）に虫の音も来つ

秋風の立てば暑き日に親しみしプールしまいぬ子と語りつつ

ふたたびを読まんと書架にさがしおり記憶ゆよみがえりくる

「歌のわかれ」（中野重治死去）

もの書きと世に知られたる人も歌詠みて励みし若き日ありき

生活短歌という言葉思いおり日々にわが詠む歌記しつつ

道たがえつつうからと来たり小城の里清水観音滝しぶきなす

用ありて遅く帰りしわれに向き子の眼の哀し何もいわなく

わが庭に潜む虫の音たがえつつ夜のしじまを競いて鳴くも

他事（よそごと）にあらず公報ひたに読む組織役選繋迫の中

細りゆく組織統（す）ぶべき人かとも頭（ず）低く礼（いや）するいくたりを見ぬ

釣りの手記

よりよい釣りを楽しむために

三川指導部　古賀和男

せっかく釣りを楽しんでいる自分自身が、知らず知らずのうちに釣りの邪魔をしていることはないだろうか。ものの本からの受け売りですが、書いてみます。

×

ここにA、Bの二つの水槽を用意し、それぞれに魚を入れる。Aの水槽にマイクを、Bの水槽の方にスピーカーを入れます。

そこで、Aの水槽の方に食肉魚を入れて、前から入れておいた魚を追い回させると、水槽の中の魚は恐慌状態になります。が、何も入れてやらないBの水槽のなかの魚も、Aの水槽に近い恐慌状態が起きるそうです。マイクとスピーカーを通じて、Aの水槽のなかの魚が発した悲鳴が、Bの水槽のなかの魚にもとどき、それを聞きわけて驚いているのではないか。つまり魚も、ある種の音声を発するのではないか、といわれているのです。

またある実験で、二つの水槽―Aの水槽にフナ、Bの方にタナゴを飼っておき、どちらにも毎日エサを投入していたら、そのたびに、そのまわりに集まって、争ってエサを食っていたのです。

ある時、フナの方のエサにタナゴの体液を混ぜたエサを入れましたが、やっぱり競争食いをしました。反対に、タナゴに与えるエサに、フナの体液を混ぜたエサを与えても同じだったそうです。ところが、そんな場合、同種族のものの体液を混ぜたエサを投入したところが、パッと散ってしまって、一時間もエサのまわりに寄らなかったそうです。

この実験でわかったことは、平和を好む魚では、同一種族の体液の〝におい〟をひじょうに恐れているといえるでしょう。

体液というのは、血液でなくて、生きた魚の傷ついた皮膚からだけ出るもので、死んだ魚の皮膚では効果がなく、内臓や筋肉なども無効だそうです。

私たちは釣りをするとき、釣りあげた魚をビクに入れて生かしておきますが、その時傷ついた魚はいないでしょうか。

また、水中で、釣り鈎を口吻以外の魚体にかけたり、バラしたりすると、当たりがとまってしまうことがあります。これは、神経の集中している皮膚に鈎がささったりすると、「いたい、いたい」と悲鳴をあげてあばれ回り、そのうえ体液をばらまく結果となり、そばにいる魚たちが、〝におい〟と〝悲鳴〟に驚いて逃げ散るからなのだろう、といわれています。

魚を大切にあつかい、バラシやスレなどしないよう、注意して釣りを楽しみましょう。

×

右の文は、三川分会新聞〝あおぞら〟（七月二十六日発行）から紹介したものです。